
ワインレッドのクリスマス

サラマンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワインレッドのクリスマス

【Nコード】

N6890P

【作者名】

サラマンド

【あらすじ】

相手はガンダム00のスメラギ・李・ノリエガです。（ファーストシーズン頃）

（前書き）

この小説はサイトで載せていた短編小説です。

念のため言いますが、パクリではありませんのでご注意ください。

甘さは控えめになっていきますのでそのところはご了承ください。

今宵はクリスマス

あの人と共に

甘美なクリスマスを…

ワインレッドのクリスマス

今宵はクリスマスイブ。

ネオンによって黒い夜空が紺色となり、その夜空から雪がさんさんと降り積もっていた。

その降り積もった雪は床を白一色に染め上げる。

そして、その雪の中を大人も子供も各々が歩いていく。

その中にスメラギとジンの二人が手を繋いで歩いていた。

「スメラギ、寒くないか？」

「ええ、大丈夫よ。」

二人ともCBに所属しており、その中で出会い、互いに一目惚れですぐに恋人となった。

二人とも恋愛経験があるため、暇を見つけてデートなどはもう何回

もある。

「とはいええ、今日は雪が降るぐらい寒い。女性は冷え症になりやすいと言っしな。」

そう言ってジンは自らのマフラーに手をかけて、自分のマフラーをスメラギに巻く。

「あ、ありがとう。でも、ジンは大丈夫？」

「俺は寒さに強いから大丈夫だ。…もうすぐ目的の店に着く。…スメラギ？」

ジンが何か密着していると思ったらスメラギの体がジンの腕に密着していた。

予想してなかったのかジンは顔を赤くする。

「マフラーのお礼よ。」

しかも肘には豊満な胸が当たり、ジンは理性を保つのにいっぱいばいだ。

「ス、スメラギ…。」

「いいから行きましょう。」

慌てて言うジン。

かく言うスメラギも顔が赤い。

結局、ジンは抵抗するでもなく目的の場所に着くまでそのままだった。

目的の店に着いた。

その店は高級レストランで、今世間で注目されている店である。

「いらっしやいませ。本日も予約いただいたジン・バートハルト様ですか？」

「はい、そうです。」

「では席へご案内致します。」

スメラギとジンは、着ていたコートを脱いで店員に渡す。

そして店員に従って、奥の外の景色が見える席へ二人は案内された。

ジンとスメラギは椅子に座り、外を見る。

そこには白銀と光に満ちた都市世界が広がっていた。

「うわ、いい眺めだね…。」

「ええ、そうね。正にホワイトクリスマスね。」

「外が雪なら最初は赤ワインでも飲みましょうか。」

「私もそう思っていたところよ。」

それを聞いていたのか、ソムリエらしき人が早速ワインボトルを持ってきた。

ラベルには「2008」と表記されていた。

つまりは製造から300年近く経っている年代物なのだ。

ワインに賞味期限はない。

時間が経つにつれて熟成されていくのだ。

「失礼致します。」

鮮やかで深い色の赤ワインが2つのグラスに同じ量で注がれていく。

「じゅっくりどうぞ。」

立ち去るソムリエ。

去った後にジンが微笑みを浮かべながらスメラギを見る。

「実は予約の時に赤ワインを最初に飲むことを言っておいたんだ。」

「あら、そうなの。それにしても2008年のものってあまりなか

「ったんじゃないかしら?」

「俺が注文出来る範囲ギリギリの値段だったよ。」

値段は数十万では到底済まないぐらいの価値である。

「ふふ、じゃあ有り難く戴かせて貰うわ。」

「どうぞ。」

二人は横に置かれたワイングラスを持つ。

「Merry Christmas。」

カンツという音を立ててグラスが軽く当たる。

今日という日を互いに祝うために…。

料理を一通り食べ終わり、外に出た二人。

当然、この場では男が自腹を切るものである。

「本当に美味しかったわよ、ジン。」

「それは何よりだよ。」

スメラギの笑みに笑みで返すジン。

すると、スメラギがジンに近付く。

「だから、これはお礼よ…んっ。」

そしてそのまま、スメラギはジンの唇に自分の唇を合わせる。

「!?!」

ジンは驚くも、スメラギはすぐに離れた。

「…どうかしら?」

「…スメラギ、君という人は…。だが…」

人目も憚らず、キスするとは思わず彼女の大胆さに驚くジン。

だがそのお返しとして同じようにキスをする。

不思議と最初に飲んだワインの味がした。

「そんな君こそが俺にとって、最高の女性だ。」

「…ありがとう。」

白い雪に赤いライトが当たり

辺りを赤一色に染める

その赤は

赤ワインのように鮮やかだった

(後書き)

実はこの短編は2年前当時にリクエストされた小説です。

大人のクリスマスをテーマに書きました。

ただ夢小説だったので、色々加筆修正してあります。

ただ、決めた期限内に完成したにも関わらずリクエストした本人から感想が来なかったという苦い思い出があります。今回載せたのはある意味リベンジかもしれせん。

なのでという訳ではないのですが、感想などあればすごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6890p/>

ワインレッドのクリスマス

2010年12月31日03時29分発行